

能〈墨染櫻〉 完曲の復興上演について

能〈墨染櫻〉の文学的背景

『古今和歌集』巻第十六・哀傷歌に挙げられた上野峯雄の詠、「深草の野辺の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」の第四句を変えたものが、この能の主題歌たる一首である。同集の詞書に「堀河太政大臣みまかりにける時に深草の山に納めてける後に詠みける」とあって、そもそもこの歌は寛平三年（八九一年）一月十三日に薨去した堀河太政大臣・藤原基経の死を悼んだものであり、事情は『大鏡』『今昔物語集』でも同様である。

この歌がいつの頃から仁明天皇崩御を悼む歌と解釈されはじめたか、分明でないが、既に佐成謙太郎が『謡曲大観』で述べているように、僧正遍昭の歌を一代記風に配列した私家集『遍昭集』との関係が大きい。

すなわち、『古今和歌集』には前掲峯雄の歌の直前に、同じ詞書を共有する僧都勝延の基経追悼歌「空蟬はからを見つゝも慰めつ深草の山煙だに立て」が挙げられる。これが仁明天皇追悼の遍昭の歌として設定を変えられ、『遍昭集』に収録されている。また、この能の後場クセに引用される「みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ」は『遍昭集』のみならず『古今和歌集』『大和物語』そのほかにあって、仁明天皇追悼歌の代表格として古来きわめて名高い。

この二首に引きずられる形で上野峯雄の「深草の野辺の櫻」の歌もまた天皇追慕の詠と解釈が変えられ、後世に至ったものであるう。ちなみに、『遍昭集』現存最古の伝本・国宝西本願寺旧蔵本は平安後期の筆写であるから、少なくとも勝延の「空蟬は」の歌を遍昭の詠と見なし始めたのは、それ以前のことである。

桓武天皇の子で臣籍降下した大納言・良岑安世の八男として弘仁七年（八一六年）に生まれた遍昭は、俗名・良岑宗貞。又従兄にあたる仁明

能〈墨染櫻〉梗概

仁明天皇の臣下・上野峯雄は、崩御を悼み出家する。

深草の御陵に詣でた峯雄が先帝遺愛の櫻の花を眺め、「深草の野辺の櫻し心あらばこの春ばかり墨染に咲け」と詠むと、いざこともなく女人が出現。その遁世の懇願もだしがたく、導師となった峯雄が剃髪の盥を見込むと、不思議や、水面に映るのは櫻の花影ばかりである。

尼姿となった女人は、「先刻の詠歌の『この春ばかり』を『この春よりは』と改めてほしい」と言い残し、姿を消す。

花見に訪れた深草の里人は、一夜にして色変わった櫻のさまに驚き、峯雄と語り合う。

峯雄の読経に引かれて、墨染櫻の精が老木から姿を現わす。尼姿の櫻の精は、先帝の崩御を悲しみつつ、仏弟子となった喜びの報恩に舞の袖を翻し、やがて花が根に帰るように消えてゆく。

天皇に重用され、嘉祥二年（八四九年）・從五位上藏人頭に昇ったが、天皇は翌年三月二十一日に四十一歳で崩御。宗貞はただちに出家し、比叡山にて円仁・円珍の両名僧に師事。『大和物語』『遍昭集』ほかには、家族にも告げず出奔流浪の劇的な逸話がある。のちに洛東花山に元慶寺を建立し、洛北紫野・雲林院の別当を兼ねた。仁和元年（八八五年）に僧正となり、これにより花山僧正・僧正遍昭と呼ばれる。同年十二月十八日、宮中・仁寿殿において光孝天皇より齡七十の賀宴を賜わり、寛平二年（八九〇年）一月十九日、七十五歳をもって示寂。六歌仙・三十六歌仙の一人として名高く、『古今和歌集』仮名序では「歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、絵にかける女を見て、いたづらに心を動かすが如し」と歌風の外面性を指摘されているが、そんなことはなく、現存する勅撰集入集の全三十五首を見ても洒脱美麗なもの、深い洞察を秘めたものなど変化に富んで、並々ならぬ雅才は疑いようがない。

いっぽう上野峯雄（岑雄）は、先述『古今和歌集』掲載歌のほかに『後撰和歌集』巻第十七・雑歌三「おしなべて降も平らになりなむ山の端なくは月も隠れじ」（『伊勢物語』第八十二段に改作引用される）の詠が残るのみで、その生涯は全く分からない。

能〈墨染櫻〉は、上野峯雄の歌を題材としながらも、人物として比較にならぬほど名高い僧正遍昭の存在をその背後に置き、先帝追慕と草木成仏の主題を併せ持つ新たな物語として開拓された、『古今和歌集』の設定を自在に脱する戯曲と考えるべきである。

*

平成二十一年三月二十九日、東京・宝生能楽堂における「塩津哲生の會特別公演」で、能〈墨染櫻〉完曲が復興試演された。

この隠れた名作が完全なかたちで上演されるのは、おそらく近現代を

通じ例のないことだと思ふ。わたくしは本公演に際し、主演者かつ監修者である喜多流シテ方・塩津哲生氏の委嘱を受けて能本補綴と演出を担当、全体に互り復曲作業に携わった。

復曲の経緯は、当日配布のパンフレットに執筆掲載。また会場で頒布販売された私家版謄本の前附にも述べ、後日『能楽タイムズ』同年五月号に「完曲〈墨染櫻〉復興報告」と題して寄稿したが、いずれも紙数・読者ともに限られ、記録としてかなり不充分であったことは否めない。改めて今回この場を借り、補綴詞章全体と演出概要を付載して詳細な記録を試み、後世へ問うべきよすがとしたいと思ふ。

現在、能〈墨染櫻〉は金剛流の上演曲となっている。ただし、のちほど言及するとおり、この現行形は明治時代の改編入、かつ安易ともいえる縮約改悪版である。

中世における演能記録集成として現在も意義を失わない『能楽源流考』所収の統計に、〈墨染櫻〉の名は見られない。曲名としての〈墨染櫻〉が見られる恐らく最古の資料である観世弥次郎長俊の談話筆記『能本作者注文』には、作者不明の能とある。長俊（一四八八〜一五四一年）以前、室町時代中期の作とおぼしく、謄本として室町後期以降の諸本が伝存するばかりである。今回、記録を博搜してもらった井上愛氏によれば、江戸中期に鳥取藩の江戸藩邸における能組に見られる由だが、内々の試演のほゞで、一流儀の公定演目表たる幕府提出の書上げ類には見られない能である。

この能の成立や上演史についての本格的な研究は、従来なされてこなかった。修辞のありようなどから世阿弥系統の夢幻能であることは認められるが、他の世阿弥真作の能に比べれば、一味も二味も異なっている

のも一目瞭然である。つまり、確実な資料としては、後述の室町時代書写の古謡本以外、皆無なのである。

周知のとおり、「草木の精をシテとした、神能でない能」は、古くからあるものではない。世阿弥の〈阿古屋松〉を嚆矢とし、これが〈西行櫻〉、信光の〈遊行柳〉に変奏されるのである。これら三曲、みな老人に化身した草木の精であって、名木の精が顕現した老体の神能〈高砂〉〈老松〉がその源であることは容易に知れる。

これに対し、「女体として現われる草木の精」を造形したのは、禅竹の〈芭蕉〉〈杜若〉が初めだろう。世阿弥は、たとえば〈葛城〉にそうした趣向の影を漂わせはしても、「女体として現われる草木の精」を正面から描くことはなかった。これ以後、〈六浦〉〈朝顔〉など、番外曲をも含め、禅竹以降の室町時代に成立した「女体として現われる草木の精」がシテとなった能は数多い。

〈墨染櫻〉は、「女体として現われる草木の精」という「人格」を自在に使いこなし、人と草木との心の通いを深く描くことに成功している。その意味で長俊以前の中世後期、禅竹や信光らの作品が世に問われたあと、世阿弥的作能法に則って新作された曲ではないかと考える。

国立能楽堂発刊『明治の能楽(一)』を繙くと、明治八年(一八七五年)五月八日の東京日日新聞掲載公告として、「五月十一日能組 芝飯倉三丁目金剛催」とあって、当時の金剛大夫・金剛唯一の自演六番能のうち三番目に〈墨染櫻〉があり、特に「新能」と記されているのが目を引く。これが近代における上演の嚆矢、かつ金剛流にこの能が編入された最初らしい。

恐らくこの時に作られた金剛版現行形は、完曲の三分の二ほどに切り

詰められた別本である。その実態は『謡曲大観』『謡曲全集』などを当たり接して頂く以外ないが、細部を検するに、その修辭は原作に比して随所できわめて近世的・明治的に変えられている。

金剛流での上演の歴史については、昭和二年五月に金剛右京が生涯た一度だけ演じた記録(『謡曲界』昭和二年七月号)、また昭和五十三年三月十九日にこの能が金剛流の演目として正式認定された時の上演記録(『金剛』昭和五十三年五月一日発行分)に纏められているが、右の明治八年「新能」として初演の記録には言及がない。『明治の能楽(一)』によると、明治十四年四月一日の諸藝新聞の記事として、同年三月十七日に金剛唯一宅で行われた華族能において「上杉君」(上杉伯爵家の前主・斎憲か当主・茂憲かは不明)が演じ、簡単な批評が掲載されている。ちなみに、米澤藩上杉家は鷹山以来金剛流を手厚く庇護したことで名高く、大部の番外謡本の所蔵元として知られる。

前述、昭和二年の金剛右京の上演は明治以来のもので、その時は大正天皇の諒闇に際してということだったが、『明治の能楽(一)』の記事を読む限り、少なくともその範囲では「諒闇の能」という認識は受け取れない。現在の同流では「諒闇の能」としてこの曲を秘曲化する傾向があるが、これは戦後の同流復興(昭和二十二年と二十四年の初世金剛殿、同五十三年の二世金剛殿。どちらも天皇崩御の喪とは無縁)の経緯から見てもいささか事大主義であり、近年意図的に定着された新たな「神話」であろうことは確認しておきたい。

今回の復曲に際して、日本学術振興会特別研究員・田草川みずき氏の尽力により、現存の〈墨染櫻〉主要諸本の校合が行われた。『国書総目録』掲載の伝本のうち主要本を翻刻、比較検討したその結果によると、

A・室町期古本、B・江戸期改訂形、C・金剛流現行形、以上に大別される（Bには上掛り系と下掛り系が混在するが、両者間での相違は殆ど見られない）。

このうち、明治の新版たるCを除くと、江戸時代以前のAと、江戸期の改訂形であるBとで、詞章はもちろん、劇展開にも変更が加えられている点が注目される。

AからBへの改訂の大きな要点は、次の二点である。

① 前シテ・女人が、ワキ・上野峯雄に出家を願う段で、Aでは衣を所望する。

これは明確に〈三輪〉の引用だが、〈三輪〉では救済のドラマに欠かせない品として、後場へ有機的にその衣が活かされる。ところが、Aの〈墨染櫻〉詞章では、伝法の証とはいえ、衣は当座の頂戴物としてしか機能せず、〈三輪〉に比べてその使用法は退化している。これは趣向の引用が外面的なものに留まった、むしろ失敗例である。

受衣の趣向を削除したBでは、これを得度剃髪の依頼に変え、それに必要な具として盥を持ち出す。前シテが姿を映すと女ではなく櫻の花影ばかりが見える水鏡の型はAにもあるが、Aではたまたまそこを流れていた流水に映る。今生俗世への永訣として、ある種の意志をもってわが姿を盥に映すBに比べて、その効果と重要度は雲泥の差である。同時に、詞章の上だけで言及され、実際には見えない流水に比べ、作り物として物品が持ち出され、否応なしに水面の存在が視覚化される盥は、その限定された水面に前シテの正体がありありと映し出される驚愕がダイレクトに観客に伝わる焦点として機能する。これは優れた演出である。

劇的に重要な以上の部分を、金剛流現行形Cでは全面削除、ために、

詞章のつながりに停滞が生じている。

② 古本Aには、亂拍子を踏む趣向は見られない。

〔クセ〕のあと、Bでは続けて〔ロンギ〕が加えられ、〔亂拍子〕につながる。〔クセ〕から直接〔序ノ舞〕となる金剛流は、結果としてAに回帰した形となる。

〔亂拍子〕の趣向については、〈道成寺〉以外の能、たとえば〈檜垣〉〈草子洗小町〉などに見られる亂拍子演出の生成の歴史と並べて考えられる必要がある。囃子方にとっても秘事として大切な亂拍子である以上常態とする〈道成寺〉以外の能で趣向としてこれを演ずることは極めて限られており、伝書にあるからと言って即、それが上演されたとは言えず、信用できる上演記録に当たるとは異なる。Bの形は、実際には、今回その記録を採し出すことはできなかった。Bの形は、実際の上演とは無縁の、恐らく机上の改訂だったと思われる。

ただ、この〔ロンギ〕と〔亂拍子〕という新案によって、〈墨染櫻〉に別の一面が生じたことは認められよう。それは遊舞性の拡大であり、結果として先帝追悼の陰から成仏歓喜の陽へ、舞台の印象がより異なって見える効果である。つまり、単なる演出訂正ではなく、劇主題に関わる改訂なので、これは、能〈墨染櫻〉の優れた新解釈であると思う。

能〈墨染櫻〉の劇主題とは何か。

前シテは仁明天皇遺愛の桜木の精として、追慕の心もだしがたく出家剃髪を志願するわけだが、先帝を偲ぶ悲しみは、諒闇を機縁として逢い難き仏法に出逢えた、草木の精の法悦と表裏一体である。だからこそ後場〔クセ〕はA Bどちらもが、「佛の御てしになるそうれしかりける」（今回は「草も木も成佛の契りぞ嬉しかりける」と改訂）と舞い納めら

れる。舞事は哀傷ではなく法悦歓喜の至れる末であり、Bで追補された「ロンギ」の末尾「御弟子となりし悦ひに。舞一手かなくてん」は、この事情をよく汲み取った「解釈」なのだ。

その意味で、舞事を「亂拍子」と定位したBの選択は、まことに当を得ていると言えないだろうか。尼姿とはいえ「御弟子となりし悦ひ」としての報恩の心が横溢する「亂拍子」には、別に寺院藝能としての長い伝統があるから、「法衆の舞」の性格でこの能に挿入されても間違いではないだろう。つまり、諒闇の悲しみを機縁に、草木の身ながら成仏し得た悦びを謳うのがこの能のドラマの深層であり、ただの悲しみに終始するだけではないのだ。

と、同時に、「ロンギ」→「亂拍子」を付加するのを特殊演出とし、これを省きAに準じた序ノ舞物を常の形とする選択を残せば、能一曲にむしろ多様な可能性を残すことに繋がる。その意味でも、Bの形は優れた工夫とすることができる。

以上の理由で、今回の上演能本はAではなく、Bに準拠した。そのほか、修辭の点でもBのほうが格段に洗練されており、流麗である。

Bに拠ることにはしたが、上演本の作成に当たっては、単純な校訂本文を作らず、主に元禄本に準拠した。Bの中でも江戸期唯一の刊本・元禄十一年田方屋伊右衛門板本は、格段に優れた修訂を試みているからである。

ちなみに、この能は、歌舞妓舞踊の傑作として知られる常磐津の大曲〈積戀雪關扉〉の発想源のひとつとして知られる。もとは天明四年（一七八四年）十一月、江戸・桐座（市村座の控櫓）で上演された顔見世狂言〈重重人重小町桜〉の大詰浄瑠璃だが、詞章には〈関寺小町〉〈卒都

能〈墨染櫻〉完曲の復興上演について

村上 浩（田村良平）

婆小町〉などの小町物だけでなく、〈呉服〉といった稀曲も明確に引用されており、作者・寶田壽來（初世劇神仙）の謡曲知識が知られる。よほど珍書の写本に拠ったのでない限り、壽來が参照した〈墨染櫻〉は、この元禄版本かその後刷であったはずである。

完曲〈墨染櫻〉唯一の活字翻刻『宴曲十七帖附謡曲末百番』（大正元年・國書刊行會）所収本文も、『謡曲大観』（墨染櫻）末尾掲載の（考異）も、この元禄本に基づいている。

元禄本の優れている主な箇所を例に挙げよう。

たとえば、前場（ロンギ）の末尾近く。Aの「きミかためなるたきもの」。まくらかなからきりかミの」（東大史料編纂所蔵の枡型本と観善署名本）はB一般に受け継がれ、現行金剛流では「枕香」が「沈香（ジッコウ）」と訛伝している。

「枕香」とは艶だが、消化不良気味な言葉。また、「枕」にちなみ閨房を匂わせる劇的背景は、ここにはない。かなり唐突な修辭である。

この後半を、元禄本では「梅が香ながら黒髪」と置き換えた。つまり、「枕香」を「梅が香」に変えたわけである。「梅が香」とは練香（「たきもの」）一般の通称。練香の色は黒い。その色から「黒髪」につなげた行文は緊密、香りも高い。同時に、半出家の「切髪」を引っ込めて消去したのは、Aの受衣を廃し、Bの剃髪に改めた意図とも通底している。

同様の言語感覚の冴えが、後場の〔次第〕にも見られる。

Aを通じて一般的な「言葉の花の夕とや」を、元禄本のみが「青葉を花の夕とや」と変えている。「言」と「青」と、漢字一字の相違だが、誤字ではない。ここに大きな美意識の差がある。

「言葉の花」という語はあるが、この能で特段の意味をなすものではない。

ない。「言葉の花の夕とや」と言われても、正直、何の感動もない。

それに比べて「青葉を花の夕とや」と連ねた美しさは、どうだろう、「散り尽くしたあとの青葉に夕櫻のなごりが思い描かれるように、黒髪を剃りこぼち、青道心となった尼の身ながら、墨染に色変じたこの花にも舞を舞う程度の色香の名残はございます」という心でもあろう。つまり、「言」から「青」に変えたことによって、イメージされる世界そのものが激変するのである。元禄本独自のこの繊細さは、特筆に値する。

もっとも、元禄本にも、優れた箇所ばかりがあるのではない。上演を想定した机上の改訂とおぼしき、そのまま実演に供するには無理な部分は随所にある。

後場（ロンギ）の末尾。元禄本では「御弟子となりし悦びに。舞一手かなてん」とあるばかりで、すぐ前述の〔次景〕につながる。実際に演出し、また、演じてみればよく分かるが、これでは性急すぎて、実に「亂拍子」が踏みにくい。

これを今回、「御弟子となりし悦びに。藤の衣を繻し。法樂報恩の舞一手いざや奏でん」と補綴した。この（ロンギ）、桜はもろろん、桃・李・躑躅の花尽くしになっている縁で「藤」としたのだが、「藤の衣」は喪服の、転じて墨染衣の雅称である。同時に、「法樂報恩の舞」とは、この能の劇主題に関わる語である。

以上は私案であって、これに類する補筆は全曲中に何箇所もある。煩瑣に互るため対照表を作成するのは不可能だが、ご興味の向きは、『宴曲十七帖附謡曲末百番』あるいは『謡曲大観』〈墨染櫻 末尾掲載の〔考異〕で元禄本をご覧頂き、比較されたい。

最後に、演出の概要について自註を加える。今回の演出は、わたくし

の作成した演出私案を叩き台に、塩津哲生氏の主導による共同作業で作上げたものである。

シテの面は、喜多流の鬘物の常として、前後ともに小面である。

前場では、A B 諸本みなワキが主題歌「深草の野辺の櫻し心あらばこの春ばかり墨染に咲け」と短冊に書き付け、作り物（櫻山あるいは櫻立木。今回は前者）に結び付けると、シテが出て舞台に入り、短冊を見るのだが、今回はワキの詠吟とともに幕際にシテを出し、思い深い態で幕際に佇立。すぐにこの歌を反復して謡わせた。短冊を見に本舞台に入るまでの間を省くのと、「いつのまにかそこにいた」効果を高めるためである。

剃髪の段では褪紅色の金襴で包んだ角盥の作り物を出し、「映るこそ理なれ名残借しの面影や」でシテがこれにとくと見入る。前場の演技の頂点である。

ここでは、盥↓下居のシテ↓背後に立ったワキ↓櫻山、この四段の直線美を意図した。他曲にない絵面でもあり、成功したようだ。ただし、盥の造形は再考を要しよう。いっそ割り物で角盥を作り金箔を押し、趣向によっては立浪の絵でも彩色した小道具を誂えたほうが印象が深くなくて良いかもしれない。

花帽子の物着は簡単に装着できる工夫を凝らし、囃子アシライの三分弱で済んで長引かなかったのは上々だった。作り物に中入し、間狂言となる。

間狂言部分は今回新規に執筆。ワキの語りを挿入した。後場の主題歌である僧正遍昭の詠歌「みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ」の由来を明確にするためである。アイ・深草の里人が狂言座から立ち、戻るまで十四分。もう少し縮めたいが、作り物内で後シテが着換

えるにはギリギリの所要時間である。

後シテの装束は、新調の鈍色地金枝垂櫻文様竹屋町長絹と萱草色大口。これは、王朝女性の喪服の配色である。しんみりした中に、沈んだ美しさが印象に残る配色である。墨色の紗の透け具合も嬉しい。

打掛を聴いて地謡が〔クリ〕を謡い出すとシテが作り物から出、正中に立つ。〔クセ〕は舞グセで、ほぼ定型の所作。続く〔ロンギ〕も一般的な所作に留め、ただ、「思ひ出でたりいざらば」と角手前から正先に回り、「藤の衣を蹴し」と左袖を返しつつ右足を引き半身となって、その左袖にてワキをサシ見込むところに、一種の性根を見せた。

常座に立ち、シテが〔次第〕を謡うと、地謡の地トリを省いて、すぐに小鼓が〔亂拍子〕を打ち出す。大鼓は床几に掛ったままである。

この眼目の〔亂拍子〕は、〔道成寺〕のように長くなく、また位もごく軽い。一段取っておもむろに「深草の。野辺の桜し。心あらば」と〔亂拍子謡〕を謡い込み、「中ノ舞」に転じた。この〔中ノ舞〕は、敵密には二段ノ舞である。初演版では段を取って囃子の地三巡ほどで橋掛りに舞い流れると、笛の調子が一調子高い盤渉に上がり、シテは早舞クツロギに倣って大きく小さく回り重ねて舞台上に戻りそのまま舞い上げた。

シテは〔ノリ地〕の地謡につれ「雨にも誘はれ露にもしほれ」と舞台正面際で左袖をかぶき身をかがめ扇で深く顔を隠す（金剛流現行型では舞台奥の作り物前でなされる型）と、最後「墨染櫻の梢に残りて」で一ノ松にて〔松風〕見留よろしく右手の扇を頭上に翳し舞台正面先を望み、地謡の内に幕に引き、ワキの合掌留。なお、諸本はすべて結尾まで大ノリだが、今回は「梢に残りて」以降を平ノリに変え、「何もない」状態に回帰する効果を狙った。全曲一時間四十分ほど。

今回の上演版は、諸本中で元禄版本にのみ見られる亂拍子を活かした

形だが、先述のとおり、古本に通例の〔序ノ舞〕（太鼓ナシ）に置き換える演出もとうぜん考えられる。その場合は〔ロンギ〕〔次第〕〔亂拍子謡〕を省き、クセ末尾から「深草の」の地謡一句に飛んで〔序ノ舞〕に入るのがむしろ自然であろう。凝った形として、クセ「墨染櫻老木とて」とより着たる苔衣」の文句から全体を老女物に演出することも可能だし、使用面も本来的には小面（または増）に限定されないはずである。シテ・監修者の塩津哲生氏が長いこと温めていた企画であり、わたくしとしてもこの完曲は眷恋の能であった。近い将来に再演されることを期待したいと思う。

復曲能〔墨染櫻〕配役

（平成二十一年三月二十九日「塩津哲生の會特別公演」）

シテ（前・深草の里女、後・墨染櫻の精）・塩津哲生
ワキ（峯雄の聖）・宝生欣哉

アイ（深草の里人）・遠藤博義

笛・松田弘之

小鼓・曾和正博

大鼓・亀井忠雄

後見・高林白牛口二、中村邦生、狩野了一

地謡・友枝昭世（地頭）、香川靖嗣（副地頭）、大村定、長島茂、友枝雄人、金子敬一郎、佐々木多門、大島輝久

復曲能〔墨染櫻〕装束付等

前シテ（里女）

面シ 小面または増 襟シ 紅または白 著附シ 箱 色入唐織（著流）
髪 色入鬘帶 紅入黒骨扇 物著シ 二白花帽子

後シテ〔墨染櫻の精〕

面Ⅱ小面または増 襟Ⅱ紅または白 著附Ⅱ箔 長絹 色大口

白花帽子 色入鬘帶 紅入黒骨扇

ワキ〔峯雄の聖〕 著附Ⅱ無地熨斗目 水衣 角帽子 墨繪扇 數珠

間狂言〔深草の里人〕 上下出立

作り物 山〔白花櫻枝挿ス。枝垂ニモ〕・角鹽〔紅色綴子ニテ包ム〕

*

〔完曲〕〔墨染櫻〕〔詞章〕

〔平成二十一年三月二十九日塩津哲生の會特別公演上演版〕

1

〔次第〕

〔次第〕

ワキ 色香もさぞな深草の。色香もさぞな深草の。野邊の櫻を尋ねん。

〔名ノリザシ〕

ワキ これは深草の舊院に仕へ申せし。峯雄がなれる果てなり。

〔サシ〕

ワキ われ御在位の御時は。朝恩身に餘りしかども。時代に變はるなら
ひとて。雲井をよそに都住居も。心とまらぬこの春かな。

〔問〕

ワキ 誠や聞けば良峯の少將殿も。先帝の御別れを悲しみ給ひ。比叡山
にて遁世と聞く。獨りに限らぬ思ひの色。深草山に分け入りて。故院の
常に観覽ありし。花をもせめて眺めんと。

〔下歌〕

ワキ 都出づれば日も既に。竹田の里はこれやらん。

〔上歌〕

ワキ 一夜伏見の夢にだに。一夜伏見の夢にだに。思ひ絶えにし別れ路
の。末こそ知らぬ深草の花は昔に變はらず花は昔に變はらず。

2

〔サシ〕

ワキ われ御陵のあたり近く。参りて見ればあさましや。人跡絶えたる
木の下は。なほ深草の花の色。

〔問〕

ワキ 誰と咎むる氣色もなく。しんしんとある古柳疎槐の跡。秋の色あ
るけしきかな。や。何となく一首思ひ連ねて候。

〔下ノ詠〕

ワキ 深草の野邊の櫻し心あらば。この春ばかり墨染に咲け。

3

〔問〕

シテ あらおもしろの御歌やな。有難の今の御詠歌やな。

〔上ノ詠〕

シテ 深草の野邊の櫻し心あらば。この春ばかり墨染に咲け。

〔問答〕

ワキ 不思議やな花を眺むる。友かと思ればさはなくて。わが歌をのみ
詠じ給ふは。いかなる人にてましますぞ。

シテ 何と御歌を詠じ申すこそ。花を眺むるにて候へとよ。この花なら
ではいかにして。かゝる御詠歌もましますべき。たゞいま手向の御言葉
にも。深草の野邊の櫻し心あらば。この春ばかり墨染に。

〔上歌〕

地謡 咲けども今は恨めしや。咲けども今は恨めしや。憂き世の春のあ
だ櫻。風吹かぬ間もあるべきか。あぢきなのならひや。

4

〔ロンギ〕

地謡 げにや世の中は。何か常なるあだ花の。夢に散りまほろしに別れ
て跡も残らず。

シテ よしや散れ十善の。梢の花も恨みなし誰かありや果つべき。

地謡 などこの春は雲霞。深草山の月の影照らし果てぬぞ悲しき。

シテ さてや帝の御ために。世を捨て人は誰々ぞ。

地謡 良峯の宗貞われ上野の峯雄なり。

シテ よしや良峯。

地謡 また峯雄にも。

シテ 劣るまじ。われも世を捨衣。

地謡 君がためなる薫物の。梅が香ながら黒髪。ながらへ果てぬ世の
中に。いつまでわれはかみつけれ。峯雄の御弟子となるべし。様變へて
たび給へわが様變へてたび給へ。

5

〔問答〕

ワキ これは仰せて候へども。われらは昨日や今日の初發心にて候ほ
どに。思ひも寄らぬことにて候。

シテ 仰せはさる事にて候へども。佛も三十成道と申せば。初發心とこ
そ申すべけれ。過去久遠劫よりこのかた。曇り果てぬる胸の月も。靈山
會場の曉を待ち。朽ちて久しき花の色も。鹿野苑の夕に開く。よしや色

こそ墨の衣。昨日今日にはよるべからず。たゞしわらはく愚かなる。女
の身として御弟子とならば。その甲斐こそはなけれども。慈悲に刺らせ
給へや。

〔掛ケ合イ〕

ワキ この上は辭退申すに及ばずとて。鹽に水を參らすれば。

シテ 嬉しや今こそ重ねたる。百年のつくも髪。

ワキ 雲かと思ればさはなくて。水の底なる俤の。や。さながら花にて
候はいかに。

シテ それこそ道理。所なからなる深草の。

〔下歌〕

地謡 野邊の櫻の木の下。野邊の櫻の木の下。鹽の水に花の影の。映る
こそ理なれ名残惜しの面影や。

〔物着アシライ〕

〔上歌〕

地謡 げに衰へへの悲しきは。げに衰へへの悲しきは。天津乙女の花鬘。
かくありがたき値遇の縁。師弟子となるぞ。不思議なる師弟子となるぞ
不思議なる。

6

〔問答〕

ワキ さて只今は何の爲の御發心にて候ぞ。
シテ さん候只今の發心は御詠歌ゆゑ候よ。

ワキ その詠歌ゆゑとは候。
シテ 只今の御歌に。この春ばかりと詠み置かれたり。この春ばかりは
情なし。この春よりはと遊ばさば。なほ行末も久方の。盡きぬ類の言葉

を添へて。

ワキ 説くや御法の言の葉は。

〔上ノ詠〕

シテ・ワキ 深草の野邊の櫻し心あらば。この春よりは墨染に咲け。

〔歌〕

地謡 花はこれまで青柳の。いとま申してさらばとて。立つよと見れば薄霞。木の間の月の影少し。花曇りして。失せにけり花曇りして失せにけり。

7

〔問答〕

アイ かやうに候者は。深草の里に住まひする者にて候。さるにても御陵近き野邊の櫻。やうやう盛りになり候間。日ごとに足を運びて候。今日もまた野邊へ罷り出で。花をも眺めばやと存ずる。まことにこの深草の里は。先帝御在位の御時。春は櫻狩冬は鷹狩。四季折々御遊絶えざる名所にて候ひしが。御崩御の後はさることもうち絶え。さながら荒野となり果て候。いや。ひとりごとを申すうちに。ほどなう御陵の邊に出で候。さてさて花の様態は如何にて候やらん。あら不思議や。昨日までは色香妙に咲き満ちて候ひしが。一夜の間に花の色變じ。さながら今は墨染となりて候よ。や。これに見なれ申さぬお僧のわたり候が。御身はいづくよりいづかたへ御入り候ぞ。

ワキ これは都よりこの里に来れる者にて候。近う参り候へ尋ねたきことの候。

アイ 心得申して候。さてお尋ねとは。如何やうなることにて候ぞ。

ワキ 當所にてはこの櫻木を何と申し候よ。

アイ いや別に名もなく候ほどに。野邊の櫻とも。また陵の櫻とも申し慣はして候が。一夜見申さぬ間に花の色變じ。さながら今は墨染となりて候。お僧それにつき。いかさまご存じ寄られたることは御座なく候か。ワキ 愚僧は仁明天皇ゆかりの者にて候が。陵に参り。いにしへを偲び候ところに。これなる櫻は。舊院の御愛木にて候間。深草の。野邊の櫻し心あらば。この春ばかり墨染に咲けと。一首連ねて候ひしに。いづくとも知らず女性一人來られ。愚僧が弟子になしくれよかしと申され候ほどに。つひに髪をも剃り。法體となられて候が。最前の詠歌につき。この春ばかりを。この春よりはと引き替へて給はり候へと言ひもあへず。花曇りして姿を見失うて候よ。

アイ これは奇特なることを承り候ものかな。さてさて先帝の御ゆかりにつき。詳しく御語りあれかしと存じ候。

ワキ われ俗にて候ひし時。上野の峯雄と名を名乗りて候が。先帝の御別れを悲しみ。われらの如く世を背きたる中にも。こゝに良岑の宗貞とて。優れたる人のわたり候。詳しく語つて聞かせ候べし。

〔カタリ〕

ワキ さるにても良岑の少將宗貞は。人王五十代。桓武天皇の御孫にて候が。先帝第一の臣。すなはち藏人の頭にて時めかせ給ふ折節。嘉祥三年三月末の一日。仁明天皇にはかに空しくならせ給ふ。それよりして良岑の少將殿。比叡山に御身を隠されて候が。當春諒闇の明くる折から。さる人のもとへとて。一首の歌を詠まるゝ。その御詠歌に。みな人は。花の衣になりぬなり。苔の袂よ乾きだにせよと。かやうにありしかば。さては出家遁世遂げ給ひけるよと。初めて世に知られて候は。今の僧正遍昭の御事にて候。

〔問答〕

アイ さてはお僧は。雲の上人にてわたり候か。それにつきそれがし存じて候は。この櫻木の精。先帝の御跡を慕ひ。また峯雄の聖に衣鉢を受けたく思ひ。假に人間の姿と現じ。御参りありたると存じ候間。お僧このところにしばしお留まりなされ。先帝の御菩提は申すに及ばず。墨染櫻の精魂をも。弔ひとむらひあれかしと存じ候。

ワキ 近頃不思議なることにて候ほどに。御勸めに任せ。このところにて佛事をもなさうするにて候。

アイ 御逗留の間は。御用のこと候はゞ承り候べし。

ワキ 頼み候べし。

アイ 心得申して候。

8

〔口〕

ワキ さてはこの花の精顯はれて。われに言葉を交はしけるぞや。げにや草木心なし。花物言はずといへども。

〔誦〕

ワキ 一佛成道觀見法界。

9

〔一聲〕

〔口〕

シテ あらありがたの御經やな。あらありがたの御經やな。今一度唱へ給へ。聽聞さう。

〔掛ケ合イ〕

ワキ 不思議やな主は誰とも知らねども。聲する方に向かひつゝ。一佛

成道觀見法界。

シテ さてその後句は。

ワキ 草木國土。

シテ 悉皆成佛。

〔歌〕

地謡 頼もしやこの文は。中陰經の妙文。尊やわれこそ草木國土に。根をさしその色深草野邊の墨染櫻と顯はれたり。

10

〔クリ〕

地謡 それ色に染み香に觸るゝ類。まちまちなりといへども。花といへばこの木に限る事。思へば櫻の面目なり。

〔サシ〕

シテ それ櫻は諸木に勝れて水を生ずる徳あり。

地謡 これによつて火災の恐れをなす事なし。さればにや帝都を花浴と號し。登花殿月華門左近の櫻に至るまでこの花の徳を禁中に移し。

シテ 主上この木に向はせ給ふによつて。

地謡 玉簾に木向といふ紋を顯はす。

〔クセ〕

地謡 かほどめでたき花の徳。誰かは仰がざるべき。中にもこの櫻は。舊院の御愛木。花の新に開くる日は。初陽の潤ほふ事を。悦こばせおはしまし。鳥の老いて還る時は。薄暮の曇れるを。悲しみ給ひしに。無常の嵐吹き來たり花より先に散り給ひぬ。なんぞ心なき。草木といふとも。歎きの色に出でざらん。この春ばかり墨染に。咲けとの詠歌恥づかしさに。花色の袖を變へ墨染櫻老木とてもとより着たる苔衣。

シテ 皆人は。花の衣になりぬなり。

地謡 苔の袂よせめてなど。乾かざらめや雨と降り嵐に誘はれ。日數にも散る徒櫻。浮世の春を隠れ家と。墨染衣如月の草も木も成佛の契りぞ嬉しかりける。

11

〔ロンギ〕

地謡 げにや心なき。岩木と見るにかくばかり。結ばぬ夢の世の春を。驚きて捨人の。姿となるぞ不思議なる。

シテ たゞこれとても御詠歌の。言の葉草の花を飾る。ありがたの教化や。

地謡 げに心なき草木も。櫻人とは顯はれて。

シテ 聲立て、花の風桃李も物や岩躑躅。

地謡 思ひ出でたりいざゝらば。御弟子となりし悦びに。藤の衣を躑し。

法樂報恩の舞一手いざや奏でん。

12

〔次第〕

地謡 青葉を花の夕とや。青葉を花の夕とや墨染櫻なるらん。

〔亂拍子〕

〔亂拍子謡〕

シテ 深草の。野邊の櫻し。心あらば。

地謡 深草のや。

〔中之舞〕

〔ワカ〕

シテ 深草の。野邊の櫻し。心あらば。

地謡 この春よりは。墨染に咲け。墨染に咲け墨染に。

13

〔フリ地〕

シテ 花の袂も風吹かぬ程は。

地謡 花の袂も風吹かぬ程は。雨にも誘はれ。

シテ 露にもしほれ。

地謡 頼み少なき花色衣の。墨染櫻の。

〔歌〕

地謡 梢に残りて。根に還る花と。なりにけり根に還る花とぞなりにける。